

市民大学再構築に関する検討報告書

第2期町田市生涯学習センター運営協議会

(2016年3月)

— 目次 —

はじめに	1
1. 市民大学再構築検討の出発点	2
2. 現状と課題	
(1)現状	2
(2)課題	3
3. 市民大学のあるべき姿とこれからの方向性	
(1)市民大学のビジョンとゴール再考に向けて	4
(2)「地域を育てる」学びの具体的な方策	6
まとめ	8

資料編

・市民大学再構築に関する検討を終えて(各委員意見)	9
・2015年度町田市生涯学習センター運営協議会議事要旨	12
・第2期町田市生涯学習センター運営協議会委員名簿	22

はじめに

生涯学習センター運営協議会は、まちだ中央公民館とまちだ市民大学HATS（以下、市民大学）が統合して生涯学習センターが誕生した2012年4月に発足しました。今年度3月をもって4年間（2期）が経過したことになります。第1期（最初の2年）は、教育プランに基づいて生涯学習と社会教育に関わる講座の内容と成果を第三者評価者として評価し、その改善に努めてきました。センター企画事業のほか市民企画事業、従来の公民館事業や市民大学事業、大学連携講座などを、市民一人ひとりの主体的学習活動を支援する観点から偏りなく複合的に布置することに注意を払ってきました。

第2期の1年目は、生涯学習推進計画に基づいて、個々の事業において時系列での改善が可視化できるように事業評価シートを再検討し、個々の事業の目的や生涯学習全体の中の位置づけを明確にし、前回の受講者の意見などを踏まえた素早い改善が可能となる情報蓄積型シートにすることで、市民の方々の生涯学習の多様化する関心や学習課題にきめ細かく対応できるようにしました。

第2期の2年目は、若年層を含むあらゆる世代の学習機会に対応するように生涯学習のあり方を再検討し、単に生涯学習の場を提供するにとどまらず、受講生同士が出会い、相互に学び合い、学習のネットワークをつくることで、さらなる自主学習の促進、市民ボランティア活動が容易に展開できるような仕組みを再検討しました。そこで「あなたを励まし、地域を育てる」というコンセプトを持って、長きにわたり実績を積み上げてきた、模範的事业である「市民大学講座」に的を絞り、問題点を洗い出し、生涯学習センター全体のあるべき方向性を探るべく1年間議論を重ねてまいりました。そこで交わされた議論を「市民大学再構築に関する検討報告書」としてここにまとめさせていただきましたので、ご一読いただきたく存じます。

また、次年度第3期においては、諮問に応じて生涯学習審議会から答申された「地域社会の課題に対応する生涯学習のさらなる充実に向けた仕組みについて」を踏まえて、公民館とまちだ市民大学のメリットを合わせもった生涯学習センターの高次の方向性を見出し、事業を展開していきたいと考えております。

第2期町田市生涯学習センター運営協議会

1. 市民大学再構築検討の出発点

市民大学は、町田市民が生涯学び続けることができるための条件づくりの一つとして、1989年教育長の諮問を受けた町田市民大学構想検討委員会の答申に基づき始まりました。1991年には、まちだ市民大学HATS推進協力員会議が結成され、1993年に「Humanity人間性」「Art & Literature芸術・文芸」「Technology & Science技術・科学」「Sports & Healthスポーツ・健康」の4つを学習領域として講座が正式にスタートしました。

市民大学のコンセプトとしては「あなたを励まし、地域を育てる」を基本に、受講者同士が出合い、相互に学び、学習のネットワークをつくることを目指してきました。

講座作成にあたる「プログラム会議」には、市民活動団体や講座修了生が参加し、講座終了後には、学習継続のために同窓生団体を作ったり、市民活動に参加するなど、市民大学で学んだことが活動へ還流していく仕組みづくりもなされてきたことは、高く評価できるものです。

2012年まちだ中央公民館と市民大学が統合され、「生涯学習センター」へ改組されたと同時に、市民大学運営協議会は解散しました。しかし、生涯学習センター運営協議会には、その任務の引き継ぎが明確にされなかったため、十分な対応がなされてきませんでした。

そこで、2015年度生涯学習センター運営協議会では、市民大学の講座を見学・調査し、プログラム委員から意見を聞き、以下のように現状を認識するとともに課題を整理しました。安全、安心で、賑わいある暮らしやすい町田市を市民自らが作っていく「地域を育てる」学習に、より発展的に展開できるよう再構築を検討しています。

2. 現状と課題

(1) 現状

まちだ市民大学の現状は以下のようになっています。

- ① 受講生募集は前期、後期2回、1回2時間、時間帯曜日は講座により異なります。

- ② 開講科目は（2015年の場合の開講期、講座回数、期の募集人数）、「現代人間科学講座」（前期11回50人）「人間関係の未来探求講座」（後期10回70名）、「陶芸入門講座」（前・後期共に9回各24名）「陶芸 電動ロクロ体験講座」（前・後期共に5回各14名）、「まちだ de エコ・ツアー」（前期11回24人）「まちだ de エコライフ」（後期11回40名）、「多摩丘陵の自然入門」（通年13回50人）、「“こころ”と“からだ”の健康学」（前・後期共に7回50名・60名）、「町田の郷土史」（前・後期共に12回各50名）「まちだの福祉」（前・後期共に7回各30名）、「まちだ市民国際学」（後期9回100名）「まちだ市民法学」（前期12回50名）です。
- ③ 個々のプログラムは、テーマに沿ってそれぞれに学習内容が吟味され完結しています。
- ④ 講義中心の講座もあるが、市民活動団体の事例紹介や野外学習、現場実習なども取り入れられています。
- ⑤ プログラム会議には、学識経験を有する方及び講座修了生でその分野について専門性を有する方が参加しています。
- ⑥ 継続学習活動の場としての修了生団体は、51 団体（自然/環境講座 11 団体、福祉講座 16 団体、健康学講座 2 団体、国際学講座 9 団体、郷土史講座 2 団体、陶芸講座 1 団体、人間学講座 8 団体、まちづくり学講座 1 団体、生涯学習コーディネーター養成講座 1 団体）あります。
- ⑦ 応募者数の減少と世代の偏りが出てきています。2011 年度の場合、60 代以上で9割を占めていました。定員を下回る講座も幾つかあります。

(2)課題

以上の現状を踏まえて、以下のように課題を整理しました。

- ① 「あなたを励まし、地域を育てる」というコンセプトのうち、市民ニーズを重視した「あなたを励ます」型の学習は当初の目的を果しましたが、市民活動やボランティア養成を重視した「地域を育てる」型の学習は、プログラムづくり、学習の循環、出口戦略が不明瞭です。地域課題を明確にし、活動に結び付く「市民社会型」の学習の在り方を検討

する時期に来ています。

- ② 応募者の年齢が高いことは、学びに熱心な高齢社会の反映ですが、「ことぶき大学」との差別化が難しくなっています。このような状態が続くと、地域社会や地域文化を担う次世代の人材を生み出せなくなる可能性があります。
- ③ プログラム内容について任されている「プログラム会議」に、講座づくりの指針が示されていないため（20年以上続くなかで、明確にされなくなってきた）、従来の枠組みを超えての新しいプログラム作りが難しい状態にあります。
- ④ 市民大学運営協議会の解散以降、講座の新設、廃止等の意思決定が曖昧になってきています。また、生涯学習センター運営協議会、プログラム委員、担当するセンター職員との意思疎通が不十分であり、役割分担が明確とはいえません。

3. 市民大学のあるべき姿とこれからの方向性

(1) 市民大学のビジョンとゴール再考に向けて

従来の生涯学習は、学習者一人ひとりが自らの課題を自覚し、能力やスキルを高め、キャリアや教養を磨くというもっぱら個人の資質向上に向けられてきました。そのため、自治体では、いつでも、どこでも、誰でもが学習機会を得られるよう、条件整備に取り組んできました。しかし近年、市民の社会参加意識の向上や公共性の転換により、自ら学んだ成果や経験を生かして、能動的に地域に働きかけていくという学びを循環させる社会的視点に立って、ソーシャルな力＝市民力へ発展させる学習が求められています。

市民大学の歴史をひも解いてみると、その基本コンセプト「あなたを励まし、地域を育てる」にあるよう、設立当初より「地域を育てる」ことを意識してきました。しかしながら、一部の学習領域ではその目的を果たし、またそのために試行錯誤されたものも幾つかありましたが、この特徴を明確に認識し、発展させることにはまだまだ十分とはいえません。

「地域を育てる」すなわち社会をつくる学びとはどのようなものでしょうか。次のようなフェーズが考えられます。

① コミュニティを再生する

(コミュニケーションのとれる関係をつくる。ソーシャルキャピタルの醸成)

学習活動を通して人と人が交わり、緩やかながらもつながっていくことを目標にします。こうした機会は、自己と他者の肯定につながり、それがコミュニティへの愛着を育み、活力を生むという好循環をつくります。地域のアイデンティティがなくなり、そこに住む人々をつなぐものが見えなくなった現代社会では、こうした同じ価値観でつながる場の交流・連携の重層的な重なり合いが、安心して暮らし、安定した社会をつくっていくための方法の一つになっていきます。

② 活動へつながる市民性を養う

私達の目指すところは、毎日の暮らしや生活する街が、もっと元気に豊かになることです。そのために、人々が集まり、街の課題を見つけ出し、共通の体験や共同作業、意見交換などを通じてお互いを理解し、皆で納得解を見つけ、行動していくという市民力醸成の学習の場が大切になります。そうした学習が、街づくり、地域の課題解決、学習支援・学校支援、市民活動団体の開発などの分野での市民参加を促します。

③ 街づくり・市民協働へ主体的に参画する

市民としての意識を形成し、個人として、あるいは地域活動やNPO活動、ボランティア活動など社会参加する活動を通して、行政に依存しがちな発想から、社会の形成に主体的に参画し、支え合い、協働することを目指します。学習したことを活かし、様々な機関と連携し、市民社会を作っていきます。

このように、「地域を育てる」学習では、異なる経験や知識を持った参加者が双方向に発信し、アイデアをシェアし、認識を広げ、視点を変えていくなど、相互に学び合う姿勢が重要になります。こうした学びは、学習者一人ひとりに変容をもたらすとともに、参加者相互のシナジー効果によって、創造的な成果を生み出すでしょう。

また、このような学びの場には、行政の他部署との連携や協働パートナー（大学、企業、NPO、サークル・クラブ、地縁組織、自治会、町内会、PTA、商店会等）との連携が欠かせません。

以上のように、発足以来尊重してきた「あなたを励まし、地域を育てる」をコンセプトとする市民大学は、そしてこれからの公共サービスとしての生涯学習は、暮らしよい街を自分たちの手で作っていくという市民意識を育て、社会参加を促す学習を支援していくことを大切にしていきたいと考えます。

（２）「地域を育てる」学びの具体的な方策

講座づくりの指針

市民大学のコンセプトに掲げる「地域を育てる」とは、地域の課題に向き合い、市民活動を通じて、課題解決を探る学びのプロセスと考えられます。そのような学びのプロセスを実現するためには、市民大学の講座において、以下のような条件を満たす必要があります。これらの条件は、同時に、講座づくりの指針となるものと考えられます。

- ① 市民の生活と地域課題をつなぐ講座テーマの設定
- ② 意見交換を通じて、受講者が自ら問題を発見し、共有できる講座の進め方
- ③ グループづくりを支援する仕組み
- ④ 様々な機会を活用した学習成果の発表
- ⑤ 地域組織との協働、地域活動への展開

市民大学の運営体制

市民大学の運営については、生涯学習センター運営協議会、プログラム委員、担当職員がそれぞれの役割を担いながら相互の意思疎通を図るための体制を確立し、講座の新設、廃止等の意思決定のルールを定める必要があります。

講座内容の改善・講座新設等

現在の市民大学講座と地域課題との関連性を見てみると、各講座がテーマとしては何らかの形で、福祉、教育、子育て、健康、保健、環境、防災、まちづくり等につながっていると思われます。しかしながら、受講者が自ら地域の課題を発見し、自主的にグループを作り、地域組織との協働、地域活動への展開を通じて、課題解決に向かうといった一連の活動に関しては、まだ十分ではないと判断されます。このような状況を踏まえて、「地域を育てる」学びをさらに推進するための方策として、次のような可能性について検討したいと考えます。

- ① 原則として、地域課題と関連する講座は内容の改善を図り継続する
- ② まちだ学総合講座（仮称）を新設する

地域課題と関連する市民大学の講座は、これまで長年にわたり実績を積み上げてきており、原則として、前述の5つの条件を満たすように講座内容を見直し、運営の改善を図りながら継続することを期待します。

特に重要なことは、講座の運営にあたり、プログラム委員は、どのような手段で、どう地域を育てる（地域に展開する）ことができるかを考えて、プログラムを策定することが求められていると考えます。

新設される「まちだ学総合講座（仮称）」としては、自主的に地域の課題を発見し、解決策を追求できるような、核となる人材を養成するという観点から、課題解決型のプログラムが考えられます。適切な定員、期間、回数等について十分検討する必要があります。

以上のように、指針に基づく講座づくり、運営体制の確立、講座内容の改善・講座新設等を着実に進めることによって、「地域を育てる」学びの実現がはかれることを期待します。

まとめ

まちだ市民大学のコンセプトである「あなたを励まし、地域を育てる」の「あなたを励ます」は、現行のプログラムで十分に達成されていると考えますが、「地域を育てる」は受講者が年を追うごとに減少している傾向が見られることから必ずしも達成されているとは言いがたいと思われます。

地域課題を発見し、解決していくようなニーズやシーズから発想する市民活動の展開力が習得できる工夫や仕組みを取り入れていくべきであろうと考えます。それと同時に生涯学習センターは、個々の企画講座の充実や工夫を後方支援するに留まらず、生涯学習審議会の答申「地域社会の課題に対応する生涯学習のさらなる充実に向けた仕組みについて」

(2016年3月)が指摘しているように、従来型の講座運営から脱皮して、他機関・他団体との協働を目指し、町田の生涯学習全体をプロモートしていく機能を強化していくべきであると考えます。今後、生涯学習センター運営協議会は、市民とセンターをつなぐ役割を再認識し、生涯学習センターの事業のあり方を見直し、改善のサポートを行っていく所存であります。

第2期町田市生涯学習センター運営協議会

資料編

<市民大学再構築に関する検討を終えて(各委員意見)>

一案としては、「あなたを励まし、地域を育てる」というまちだ市民大学講座のコンセプトを町田市生涯学習センターの企画講座全体の理念として掲げ、むしろ市民大学は「地域を育てる」講座に特化し、それに該当しない講座は市民大学講座から外し、他の企画講座とともに「あなたを励ます」講座として展開し、他の企画講座に「地域を育てる」講座があれば、市民大学講座に吸収していくような再編を積極的に実施すべきであると考えます。したがって、市民大学講座のプログラムは、市民力を育て、それを地域に展開していくことができる人材を養成することに改めて留意して、再考する必要があると思います。

(石川委員)

NPOとの連携を

公的社会教育に責任を持つのは基礎自治体ですが、近年、社会改良運動に取り組むNPOセクターが大きく成長してきました。全国的な視野で立法運動に取り組む団体もあり、地域に根ざした連携・協働が期待されます。(岩本委員)

私たちはしばしば、既定の仕事には勤勉だが、新規の活動は躊躇する傾向があると指摘される。ならばカリキュラムにあらかじめ「社会を育てる」活動が組み込まれていれば、受講者は自然に第一歩を踏み出せるのではないか。(押村委員)

まちだ市民大学は、その歴史をひも解くと、早い時期より人づくり・地域づくりに貢献する場であることを期待されてきた。顔の見える関係づくりやグループ間のつながりづくり、さらには、地域の課題を知りそのために動き出す学習の場として進化していってほしい。 (辰巳委員)

これからの学びは、自分を高める「個」の学びに留まらず、他に発信し共有していく事が大切ではないでしょうか。一人では難しことも人と人が繋がることで出来ることもあると思います。市民大学での学びがその一助となることを期待します。(富川委員)

「学び」の場は人々の間に笑顔を醸し出す大切な交流の場でもある。市民大学に於いてはプログラム委員との交流を密にし、社会の変化に伴う情報を分析し、必要とするテーマを選択し地域の人々に繋ぐことで市民大学HATSの存在は重大な役割を担っている。

(西原委員)

市民大学受講者、スタッフは、地域の各組織に働きかけ、色々な手段で、学習成果を地域に展開していただきたいと思います。既成のグループやサークルと連携したり、勉強会や発表会などを通して、地域活性化を図っていきましょう。(佐合委員)

「地域を育てる」とは、自由で、平和かつ公平で安心して希望をもって暮らせる豊かな地域(社会)創りに他ならない。昨今、安全法制の改憲解釈やマスコミや大学等への介入発言等、憂慮すべき実態が惹起している。「地域を育てる」が、狭義の「地域主義」に陥ることなく、市民が主役となり、市民による市民の為の地域づくりを大局的な観点から推進して頂きたいと願っている。(布沢委員)

市民大学について協議しつつ次記の気づきがあり。①学びは自分のみでなく他者のために生かすこと、②他市好事例と比べ町田の学びを達観できたこと、③例会以外に丸二日も話し合う仲間ができたこと、最後に、市民大学の更なる発展を期待致します。(二見委員)

私自身は、郷土史、多摩丘陵の自然入門、まちだの福祉を受講した後、史考会、みどりのHATS、輪2013等に加わりサークル活動に参加していますが、今後も、「地域を育てる」学びを続けて、地域との関わりを広めたいと思っています。(柳沼委員)

「HATS」での学びは十分にあなたを励ましました。次はあなたが得たものを地域に分け与える番です。小さな地域例えば家族、友人、職場、隣人からでも始めましょう。時を選ばず明日からでも、学びをしっかり吟味した後からでも。(吉川委員)

<2015年度町田市生涯学習センター運営協議会議事要旨>

[日 時]2015年4月20日(月)10:00~12:00

市民大学見学決定/議論の方向性が迷走

事務局 ■「市民大学の現状・課題・展望について(案)」という資料を作成した

現状把握の上、理解。必要に応じてはプログラム委員の方たちと意見交換を望む。

10月からどういった方向で まとめていくのか方針検討し、2月3月でまとめ

- 1997年に策定した「町田市民大学HATS推 進計画」(以下、推進計画)がある。
- こちらで「ここがゴールです」、「ここまでやってください」と示 してやっていただく話ではないと思っている。
- 運営協議会の役割は要綱で示していて、市民大学の見直しの記載はない。市民大学に関しては 運営協議会の役割にはないが、事業評価だけではない役割もあり検討いただいてもよろしいの ではないかという投げかけの下に行われているものである。意見をいただいたからといって拘 束力はなく、皆さんが集まって議論いただく場というものが重要であると思っている

会長 ■コンセンサスを得るためにも最低限の知識を実地踏査も含めて まずは見てみる。その後ビジョンを形成する議論。見学をスタートとする。

- 市民大学を機軸に生涯学習センターがどこに向かって行くか、全 体としてのあり方を考えるうえで一つのバロメーターとして扱う。「プログラム委員が作られたプログラムは、ビジョンに沿って 作られているのか」、「『あなたを励まし、地域を育てる』というコンセプトと外れていないか」を確認。
- 将来的に生涯学習がどうあるべ きかのコンセンサスがとれてないと1つ1つのプログラムについても議論できない。運営協議 会の役割は町田市の生涯学習を変えることではなく、プログラムをより改善していくなかで、生涯学習についても考えていくということである。見学と並行的にビジョン形成のための議論をやっていく。また、他市町村の 現状把握について資料があれば良いと思う。
- プログラム委員はビジョンをもとにプログラムを作っている役割であるから、プログラム委員にビジョン自体が良いかを聞く理由がない。

委員 ■市民大学の現状・課題・展望について取り組むということだが、何を目的に何をゴールとするか不明瞭

最低限、推進計画を読み「市民大学とは何なのか」の共通理解でスタート。

生涯学習センター、生涯学習審議会の意見を聞き、全体像を把握すべき。

市民大学の方向は、社会の変容か、個人の学習か、市民を集めてゼロベースで「どんな市民大学だ ったら良いのか」など議論して行く場も必要。

- 市民大学のプログラム委員の方たちと懇親会や座談会が必要。
- まずは見学に賛成、理解に格差 がある。
- 市民大学の魅力が大事。市民大学の本来の機能、魅力づけを議論すべき。
- 生涯学習センターの職員も、市民大学について研究調査していると思う。例えば、他市町村の 市民大学はどういったものか、生涯学習審議会では何を求められているのかなど、運営協議会委 員が知らないこともある。市民大学のなかで、運営協議会委員はどこを任されているのか、今 一つピンと来ていない。生涯学習センターとして、どういったやり方で今後展開して行こうと 考えているのか
- 推進計画と照らし合わせて市民大学がどうなっているかも含めて考えることをするの であれば、もう少し長期的な視点やマクロな視点も必要である
- 全体の講座の傾向の推移など(例えば参加者の推 移や評価の推移など)多様なマクロな視点のデータ必要

2015年6月29日(月)10:00~12:00

プログラム委員からみた市民大学の歴史と課題

(ゲスト:堂前プログラム委員の説明)

■市民大学の歴史

1983年:町田市長期構想にある「市民手づくり大学」で「生きがいある人生に挑戦しボランティア やまちづくりを担っていくための学習機会を市民が相互に手づくりで提供し、多様な形で人づくりを進める」「市民を地域づくりの主体ととらえ、実践的な参加・交流型の学習を指向している」「まちだ市民史学」と福祉「共に生きるまち・人」が加わり正式開講

1991年:まちだ市民大学HATS推進協力員会議が結成

「まちだ市民大学開設準備フォーラム」が開催され12のプログラムが発表

「市民大学のプログラムは、市民が身近な諸課題を学び、個々人の文化の高揚を図る『場』であります。その成果は、地域文化づくりに、健やかで温かい地域のまちづくりなどに、反映されることが市民大学の目標でもあります」

「多摩丘陵学・自然論」「心と体の元気学」2講座が試行

1992年に1995年国際学講座や人間科学講座の原型となる講座が加わる。

1993年から1994年多摩丘陵学からボランティア養成に力がシフトされた「まちとくらしの環境講座」や「陶芸」

1995年の阪神淡路大震災以降、NPO(非営利法人)を 後押し

「あなたを励まし、地域を育てる」を基本コンセプト、HATSのHは Humanity(人間性)、Aは Arts(芸術・文芸)、Tは Technology & Science(技術・科学)、Sは Sports & Health(スポーツ・健康)

■「まちだ市民大学についてのメモ」は'90年代に職員古屋氏の記述

1990年の町田市市民大学構想検討委員会市民大学HATS構想 「生涯学習」に関する諸課題にすべて市民大学で答えようとしたかのような壮大で総花的な内容

① 「生涯学習の総合的システム」として、「学校教育、社会教育、地域の学習 活動をつなぎ総合的な学習へと発展させ、町田の文化を創造し継承していく主体をつくること」、「生涯学習のための情報センター、研究センター、人材バンク」、「学習に関連する市内の あらゆる機関や活動をネットワークする結び目」

評価:1998年時点では「まったく 実現できなかった」「公民館の代用品のように見なされ、“公民館とどうちがうのか”という議論もしばしば行われた」と記述

② 「ユニークな学習領域」として、まちだ市民学[社会的課題に運動型で取り組み、市民の社会参加と交流をはかる]、遊々創造学[自らの趣味や資質を高め、成果 を町田文化として発信する]、活き活き技術学[伝承技術や先端技術を生活に活かし文化へと 高める]、心と体の元気学[心身をリフレッシュし、健康ではつらつとした生活を創る]を想定

評価:「あなたを励まし、地域を育てる」というコンセプトのなか で市民ニーズを重視した“あなたを励ます”型と、市民活動やボランティア養成を重視した“地 域を育てる”型の別々の意味合いとして2つ方向性で考えられるようになった。「方向性が不明瞭」という意見も

③ 「市民とともにつくるプログラム」「プログラムは市民生活から芽生えた学習を育て、市民のアイデアを活かし、市民とともにつくりあげていく」「市民の学習運動と連携し、活動者が市民大学の講師 や学術員であるような関係を築いていく」「講座型よりも参加・交流・体験型の学習方法を主 体とし、学習成果が継承され地域社会に環

流されるようなプログラムづくりを目指す」
評価:市民大学の修了生がプログラム委員として活躍するなど比較的成功した部分

■「まちだ市民大学HATSの現状」(環境講座の例)

参加者が集まらない事態に直面する度に名前を大幅に変更、若干の増加

環境講座の参加体験型ボランティア養成講座→ボランティア活動現場や環境問題の現場に行くなど実地的

「町田市民環境講座」→「まちだ de エコライフ」論理的に現在の町田市の環境問題について座学、理論的に学びたい方は深い教養に興味があり、環境問題でいえば地球環境問題など

施設を見に行く変則的なプログラムを作ると評判も良い。

「多摩丘陵学・自然論」多摩丘陵 に特化した自然入門講座→「多摩丘陵 の自然入門」と「町田の環 境講座」「町田の環境・参加体験講座」→(前期「まちだ de エコツアー」・後期「まちだ de エコライフ」と町田市の自然の楽しさを知ろうという自然講座(「多摩丘陵の自然入門」)

「6人の プログラム委員のうち、3人は講座修了生で構成されている」

「9つのプログラム会議のうち 7会議には修了生が委員として参加している。」

修了生団体が市民大学の講座運営支援やまちづくりに活躍すること、その実状

■修了団体のリスト化

「まちだ市民大学HATS修了者団体紹介」には自然・環境 分野は11団体、福祉で16団体、健康で2団体、国際で9団体、郷土史で2団体、陶芸で1 団体、人間学で8団体、その他2団体の、合計51団体がリスト化

■1993年に結成された「みどりのHATS」は、講座運営も役割の一つにした団体、新たにボランティア活動、参加体験型講座の受け入れ団体の一つ

■発足当初に比べると修了生の講座支援減少。現在 もプログラム委員等で支援

■1999年：市民がプログラムを作り、職員と共同して行っている点で高い評価

■瀬沼氏：「多くの修了者団体を生み出していること→地 域づくりの人材養成機関として成功。」

「地域を育む」への意識

■市民ニーズを重視した“あなたを励ます”型、市民活動やボランティア養成 を重視した“地域を育てる”型で、市民のニーズと社会のニーズのそれぞれを尊重することが つよく留意された

■岸氏の論文では、“あ なたを励ます”型・“地域を育てる”型について「市民大学の将来をカルチャースクール型に一元化しないためにも、ぜひとも慎重に、大切に育成されるべきものと認識されていた」

■古屋氏は「それにより、社会的必要課題への取り組みや“地域”の視点がつよく意識されるようになり、その後のプログラムの方向付けに大きく影響した。一 方で、構想が狙いとしていた市民文化の創造にかかわる学習が軽視される傾向となる」

■2000年にまちだ市民大学HATS運営協議会が出した提言では「“あなたを励まし、地域を育む”が市民大学のモットーであるが、“励まされたあなた”がその力(知識と意 欲)をもって“地域を育む”活動に参加する、すなわち学習成果の“地域還元”こそ市民大学 の基本姿勢である」とあるように、「地域を育てる」ということをかなり重視していたように 見える。

■2007年にまちだ市民大学HATS運営協議会「まちだ市民大学HATS 推進計画検証と提言」

「まちだ市民大学HATS”の他に類を見ない最大の特徴は“地 域を育てる”つまり、地域に関わる力を持った人づくり、を正面に掲げていることである。いうまでもないが、市民との協同こそが、現在および将来の地方行政の最大課題であり、この課 題に応えうる人材の育成に資する機関がまさに、“まちだ市民大学HATS”なのである。この特徴を明確に認識し、そのいっそうの発展を図るべきである」

■学習消費型の講座を求めている市民の消費者としての ニーズと社会参加ニーズ、

■「行政の 経済的・人的資源が限定されている一方で、地域課題が多様化していく現代社会においては、 社会的課題に取り組む市民の養成が急務。」、「『市民が市民を育てるのを行政がお手伝い』では 概括できないか？」目標が見えづらくなっているとしたら、こういった点を整理し たらいいいのではないか

その他全般課題

■子ども、若年層、子育て世代への対象も検討

高校生向けまちづ くり参加講座（川崎市高津市民館地元のFM局番組制作）

■プログラム委員同士の情報貢献、連携、再構築

■市内大学との連携もかつて市民大学でやっていたが、さがまちコンソーシア ムの登場で役割が難しい。高度な学習は、大学へつなげる

■運営体制：HATS運営協議会とプログラム委員は年に1度会合、現状はなかなか噛み合わない

■現在の運営 協議会の評価は疑問との声。プログラム委員も戸惑っている、評価基準を明記してほしい 修了生団体の設立や修了者の活動、修了生のプログラム委員就任、講座運営の協力などを評価基準へ

■各プログラム会議と「職員と 市民が一緒に作る」という信頼関係は時代と共に薄れてた

委員からの意見

■公民館との違いを明確に。市民大学はある目標 がある。公民館は明確なシナリオない。大きな目標としては人づくりをして地域の課題に答えるというのは同じ。町田市にとって重要な市民と行政で連携課題を扱う。修了生団体を公民館が支援するだけではなく他の部署に繋いで活かして行くことが必要

■市民大学がその枠からはみ出たところで連携して解決しなければならない課題がある

■「市民大学は市民社会型で地域で展開するきっかけ作りというコンセプトがある」「実践中心でいくべきではないか」、「高齢者が地域で展開することができるのだろうか」

■市民大学はよく出来ていて今までの歴史に否定することはない。未来志向型で今後どういった未来を描き、町田市民を育てたいのかを考える

- 全般的に高齢者に参加者が偏っているというのはマイクロな部分であり、マクロ問題から見ないといけない
- 自律教養型と市民社会型両方あっていい。市民活動に移るのは課題を捉え解決し交渉や企画をするなど技術的な部分が必要。そこを一緒にやろうとするとプログラムやターゲットが明確にならず、人を集めにくい
- マクロな部分で市民大学が何をを目指すのか、マイクロの部分でどう展開して行くのかを考えたい。

2015年7月20日(月)10:00~12:00

市民大学見学記と今後の課題

市民大学全般への意見

- 市民大学の全部を束ねるビジョン、コンセプト「地域を育てる」を重視すべき。
- 市民活動によって社会を動かすという講師の話には納得。受講者は地域で活動することに関心があるのかと疑問。明確な工夫をしなければ人材を育てるのは難
- どの講座もためになり、知識や情報が増えた印象。問題提起や事例紹介は啓蒙的な学習が中心。学習者の意欲をどこにつなげるか不明。学習プログラムの仕掛けを検討すべき。
「地域を育てる」は情報もスキルも現場に出向くことも必要であり、プログラムの工夫が必要。
- アンケート調査の実施(市民のニーズ変わる。十数年していないというのは、努力不足。)
- 連携: 社会福祉協議会、自治会、町内会など横とのつながり(玉川学園をモデルケースにして他の地域にも広めたい)
- 講座を聞いたあとで自分が進みたい方向が見えてくるような取り組みへの方向づけがほしい
- 全部の講座が「あなたを励まし、地域を育てる」という市民大学のコンセプトに対して同じようにウエイトを置くのは難しい
- うまい具合にニーズがヒットすれば大学生も熱心に参加する。大学にも広報してほしい。
- (会長)プログラム委員としても「地域を育てる」方策として運営協議会からなんらかの共通の方針ほしい
「公共性のある生涯学習とは」という視点を持つと総花的ではない あるべきプログラムが生まれる
- 市民大学の社会的認識を高め、コミュニティカレッジと機能すると、10代の学びの場ができる。

今後の検討課題

- ① プログラム委員と職員の役割分担(プログラム会議の運営、講座の企画など)
- ② プログラム委員の構成(選任基準、委員数、新任・退任の手続きなど)
- ③ 市民大学全体の課題について協議・検証する体制および運用ルール(講座の新設・統合・拡大・縮小・改編・廃止等の手順、市民大学受講生・修了生団体の発表の場、修了生支援の方策、プログラム委員合同会議、市民大学関係者連絡会の活用)

個別講座への意見・雑感 委員

- 現代人間科学講座: 真摯に授業を受け、熱意を持って取り組んでいた。一方で、活発に意見交換をする雰囲気ではない。地域活動に繋げるには、違った構成の仕方を検討。意見交換のスキルを身につける仕掛けが必要。講師の講義はわかりやすく、賑やかで良い雰囲気。
- まちだの福祉、町田の郷土史、現代人間科学講座: 90%以上が60代。講師やプログラム委員との意見交換の機会がほしい。
- “こころ”と“からだ”の健康学: 一方通行的な講義である印象。「地域を育てる」・・・受講生自らが色々な問題を発見したり、共有して問題解決にあたり、その結果を発表するというような仕組みを作るべき。
- まちだの福祉参加者は高齢者が多いが、高齢者にとって身近な問題、課題に取り組んだ有意義。前半は入門編で広く狙いにあった内容。
- 現代人間科学講座: 高齢者の参加者が多い。内容は非常に深くタイムリー。
- 陶芸入門講座: 定員割れ。
- 町田の郷土史は非常に勉強になる内容であったが、「地域を育てる」「地域での展開」といった視点を考えると、座学の典型講座ではそれを実現するのは難しいと思った。そのなかでも
- “こころ”と“からだ”の健康学: 健康学伝道師カードはよい。地域を育てる活動を展開できればいいのだが。

2015年9月25日(金)

「あなたを励まし、地域を育てる」の「地域を育てる」とは何か？

本日の課題意識

「あなたを励まし、地域を育てる」

「あなたを励まし」はインプットする学習

「地域を育てる」は学んだものを地域活動に活かす循環型の学習

生涯学習センターとして地域活動に対しどういった方向性を打ち出して行くのか

地域活動を扱う町田市関連部署との連携、住み分けをして行くのか

社会をつくる学びの方向性(方向性の/他地域の紹介)

①コミュニティの再生・創造(コミュニケーションのとれる関係をつくる。ソーシャルキャピタルの醸成)、②活動へつながる市民性を養う、

③(「住民自治」→「まちづくり」→「市民協働」)に参画する

行政の他部署や自治会・町内会、NPOなどと連携は前提

1)テーマ探求学習と発表(座間市のあすなろ大学)

2)企画から運営までを市民が主体的(足立区のあだち区民大学)

3)地域の課題を学習し 現場に出て行く2段階形式(浦安市の市民大学、江戸川区のえどがわ大学)杉並区の4)市民活動そのものを支援(すぎなみ地域大学)

5)若い世代が企画・支持(シブヤ大学)

6)体験講座としてインターンシップの形式(新宿区エコリーダー養成講座)

「地域を育てる」とは、に関する意見

■市民大学で学んだことを地域の人に広めることか？(健康学講座の伝道師カードでもいいのでは)

■学んだことを広めるだけではなく、地域をどういった方向性にしていくか。ビジョンが必要。

(岡山や板橋の例:子孫の代まで持続し残したい街づくり)

■町田市がどこに向かうかを考え、その中で市民大学 がどうあるべきかを考えるべきである。

■市民大学が出来て20年以上経ち、受講生も多く修了生団体も40団体以上になる。福祉、健康など地域で色々な活動がされているが見えていない。修了生団体の具体的な活動なども紹介必要。

■修了生団体「史考会」では、今年度の野外 学習プログラムを実施。活動の結果は冊子を作り、教育委員会や地域に無償で配布。

■「地域を育てる」には、1には、地域活動の担い手を発掘し育成することである。これは市民大学の使命であり、生涯学習センターの役割になる。2には育成された人材が、目標を持って地域で活動をしていく、得たものを地域で発揮して行くということ

■「地域を育てる」については、地域にどのように展開するかが問題である。健康学の後継 講座の活動を実施している。自宅で家族に話すのでも地域への展開か、受講者のうち何人かが地域活動に繋がれば良い。

■子育て、高齢者、障がい者、健康、環境、防災、防犯、まちづくりといった分野は市民活動とむすびつきやすい。特定のテーマに基づいて少人数で課題発見、解明、発表などをして突っ込んだ学びを行うコースを用意してもよいのではないか

■受講生が学んだ後に修了生団体の活動を紹介し投げかけることが必要ではないか。

■(会長):皆さんの「地域を育てる」のゴールが大きく違っていた。ゴールをどこに置くか検討すべき。

[日時]2015年11月30日(月)10:00~12:00

「学校教育」や「生涯学習審議会答申」と「地域を育てる」の関係

事務局 ■「地域を育てる」といっても様々な捉え方があり、しくみの話なのか、例えば学習したことを自宅で家族に話すことでも地域に広めたことになるのかなど、どういった部分を「地域を育てる」と考えて、どこまで市民大学で実現していくのかを本日はご議論いただきたい。

「学校教育×市民大学」

委員 ■学校が地域の核となるというのは大事な点である。しかし、学校に足を運んでくださる方、そうでない方がいるので、地域への発信源として学校を活用していただけるとありがたい。

会長 ■学校教育を受けている生徒が、生涯学習の場にもどのように関わって行けるかを、どのようにお考えか。

- 委員 ■子どもたちにも勉強だけで目一杯という子と、進学を重点に置いている子がいるなかで、学校教育以外の学習への取り組みは現状では時間的に厳しい。今後の課題である。
- 受講される方一人ひとりにゴールの設定があり、こちら側が設定して「ここまで行きなさい」と言うものではないのではないか。
- 会長 ■生涯学習という大きな括りの中に学校教育があるという有り方について、どのように考えるかお聞かせ願いたい。
- 委員 ■学校教育で日頃忙しい生徒たちも実はそれが生涯学習の一部であり、卒業した後も自発的に学ぶ生涯学習の機会もある。そのような生涯教育の種のようなものが、学校教育の中で埋め込まれていくと素晴らしいことだと思う。
- 会長 ■なかなか、その点が生涯学習センターの事業にうまく組み込めていない。一方、幼児分野でうまくいっているのは、学校教育との接続部分が恐らく根底にあるのだと思う。市民大学のゴールの設定という点で、学校教育との関りが抜けていたので、今回は取り上げさせてもらった。
- 委員 ■市民大学の参加者に、個人のゴールがあるのは確かである。しかし、修了後に一歩先に行きたいと思った時に、「自分でゴールを設定して地域に広げて下さい」というのは難しいのではないか。学ぶことと、人に教えることや地域に広げることは、大きなギャップがあると思う。また、学校生活がしんどいという子に、学校教育が全てでないことを見せることができるのではないかと。
- 学校との連携が、できていないのではないかと。
 - 市民大学の修了生のうち、登録した方をコーディネーターが探して学校で活躍するような方法はあるのだと思うが、現在は大変難しい。
- 会長 ■「あなたを励ます」と「地域を育てる」を分解して、一人ひとりが自発的な学習をする場としての「あなたを励ます講座」と、学んだ人が地域に戻って活躍していただくための「地域を育てる講座」として、生涯学習センターとして2つのゴールを目指すやり方でやっても良いのではないかと感じる。
- 委員 ■コーディネーターの立場として、市民大学の現在のプログラムから修了生に来ていただきたいと思う子どもたちに展開できるプログラムはあるか。
- 歴史講座は担任からもニーズがありリアリティのある学びができるかもしれない。また、子どもたちを担当の先生が近くの原っぱに春を探しに連れて行っても、なかなか見つからない虫が、自然学を学んだ人が一緒にいくと見つかったりすると思う。
 - 小・中学生も忙しいので、その中でどういった展開をするかを考えなくてはいけない。びっしり詰まっている学校のスケジュールの中で、どこに織り込むかが非常に難しいと感じる。
 - 学んだことを地域に広げるために話すことや表現することをお互いに学びあうような講座があれば、安心してお願いできると思う。
- 会長 ■我々は学校教育にいかに、生涯学習センターが寄与できるかという視点を持っていると思うが逆に学校教育の中で出来ないことを生涯学習センターに求める需要と供給があるのか。
- 委員 ■やはり森や公園に行っても、目の付け所や価値は教員に知識がないので、専門家から話が聞きたい。子どもたちのレベルに噛み砕いてご説明していただくと共に、子どもたちの質問に対して優しく答えてくれる方に一番のニーズがある。
- 中学校のニーズで言えば、1点目は、放課後の補習学習や休み期間の学習補助のお手伝い、2点目は部活動の支援である。「自分はこれを乗り切ったよ」という経験を持っている若い人達の話のほうが、中学生には馴染みやすいようである。
 - 世代間交流は必要だが、町田市で抱えているのはシニア人口増加の問題であり、どう救うか、さらに子育てや若者たちの世代をどう繋ぐか、ターゲットをはっきり理解して市民大学を考えたいかがだろうか。
 - 「地域を育てる」講座を実施するには、そのためのコーディネーター機能や能力が必要になってきている。それらが、クリアできれば押村委員がおっしゃっているような地域への展開は楽にできるのではないかと。
 - 「あなたを励まし」と「地域を育てる」を別々ではなく、同時進行的に展開すると良いのではないかと。市民大学で学び、さらに広げようという意欲のある人には広げ方の講座がワンクッションあると良いのではないかと。
- <生涯学習審議会答申×市民大学>**
- 各論、総論を繰り返しているが、ここで2012年の諮問を受けた2013年の「町田市における生涯学習の進め方について-答申-」の当日資料と絡めて、町田市生涯学習審議会について今年度の状況を含めて、お話を伺いたい。
 - 現在、生涯学習審議会としては、次の答申を出すのがミッションであるが、前回から2年しか経っていないので新しいことは言わず、前回の答申が網羅的だったという反省もありメリハリをつけた内容にしていきたいということ、さらに藺田会長からはもっと市民や行政に読んで頂きたい、見せ方も面白くビジュアル的なものを

作ってはどうかと話されている。次回答申の最終の落としどころとしては、6つの項目に関する宿題を委員が貰っているところである。まず生涯学習とはなにかを市民にわかってもらうこと、2点目は地域の課題の解決に関わる生涯学習ということを強調したいということ、3点目は学んだ人を地域の現場で活かしていく、人と地域を結びつける仕組み。4点目は、町内会、自治会、地区協議会、NPO、大学、市民団体を生涯学習の元に繋いでいくこと。5点目は、学校の抱えている問題、地域と学校の繋がりを強化する課題。6点目は生涯学習公共施設の連携とあり、生涯学習センターに期待されているのがわかる。学習を学習に終わらせない地域での成果と言うのか、学んだことによって地域が変わっていくというのが、一つのポイントになるかと思っている。

- 「地域を育てる」のゴールは、社会も政治も思想も移り変わり明確に設定するのは難しいなかで、共通のゴールを探さなければならないと感じている。また、岩本委員から伺った生涯学習審議会の現在の状況では、新たな答申作成では前回答申から改革や反省点はどこにあったかを伺いたい。
- 前回答申によりどの程度政策に反映されたのか、どういった点が不十分なのかは委員からも出された部分である。しかし、10年計画の町田教育プランのうちの5年が経過したところであるので次の手を考えるというよりも、中身の肝の部分のアピールしていこうという流れにはなっている。
- 「ゴールの設定」についてだが、受講者それぞれの習熟度や環境でも変わってくるので、大学のように一定のカリキュラムを修了したら卒業というのとは違い、設定するのは難しいのではないか。目標、ゴールを変えるのではなくて、やり方を少し変えることで少し違う方法も出てくるのではないか。
- ①コミュニティの再生、創造を取り上げるなら、受講中に受講生間の意見交換をすることにより、コミュニケーションが語れる人間関係を作ると言うのが大事だと思う。それこそ市民大学にやるべきことだと思う。②活動へつながる市民性を養うは、やはりグループ活動は一人だけでは何も出来ないで、グループを作ることで威力を引き出すような講座を作ること。③市民協働に参画するというステップという意味合いでは、行政、大学、NPO、地域組織について理解し情報を提供することも市民大学の使命。

2015年12月18日(金)14:00~16:00

「地域を育てる」のゴール

＜「地域を育てる」の具体的な進め方＞

委員 ■ 資料①、②を基に説明。

委員 ■ 「地域を育てなさい」と言われたら、市民大学はすごくハードルの高いものになると思う。「学ぶのはいいけど、人前で話すのはとても」と思っている方が多いと思うので、表現や発表をする講座といった学んだことを外に出す練習をする講座が必要だと思う。

■ 「地域を育てる」活動を全くやっていないかと言うと、現在でも環境や福祉など多くの修了生団体があり色々な活動がされている。生涯学習センター側のPRする力がない。

会長 ■ ゴールや目標という話があったが、目標は達成しなければならないものであって、今ここで議論されているのは目標に向かって行くその先が欲しいということではないか。

＜意見の取りまとめ方について＞

委員 ■ 期末に向かっているなので、この協議会で言いつ放しで終わるのは消化不良に感じる。意見を出し合い集約するなり、3月までどこまで行くのか、何をするのかを明確にしたい。

会長 ■ 今市民大学で問題になっているのは、カリキュラムのマンネリ化や、学習を進めていくと初心者がついていけないと言われている。プログラム委員はそういった意見や募集人員をどう集めたらいいかなどを気にしながらやっていると思う。最終的には、市民企画をする人やプログラム委員が、自分たちが担当する講座はどういった位置づけなのかがわかり、「あなたを励ます」講座なのか、「地域を励ます」講座なのかを明確に示すものがあると、やりやすいのではないかと思う。

委員 ■ イメージが沸きづらいのだが、プログラム委員が自己分析していただく機会を作ることか。

会長 ■ 企画をする人が不足しているということも1つの問題であり、養成しなければならないという点もある。企画する人たちが自分たちはどこの位置づけを担当しているのかわかるようなもの的大枠を決めるということ、3月までにやっていきたい。現在まで体系的に色々なご意見をいただいているものをラッピングしたい。

委員 ■ ここでまとめたことは、生涯学習センターへの提案ということになるのか。協議会で決めたことを生涯学習センターが受け入れたとしても、プログラム委員は講座を計画するに当たりそれを受け入れる準備はあるのか。

事務局 ■この運営協議会として、どういったあり方を提案していくのかをプログラム委員の皆さんにも考えていただくということになる。

委員 ■委員の意見はこうであったというのを記録に残し、1年間の成果をレポートにまとめて提案しようというのが良いのではないか。

■それぞれ皆一度意見を出してみるのはいかがか

■この1年間の議論を議事録等で拾っていき、レポートに仕上げるのが良いのではないか。個別アイデアとして皆さんが出したもので良いが、折角見学して皆さんで感想を述べたので、まとめには反映したほうが良い。

事務局 ■今まで議論したことについても議事録などで振り返り、きちんとお伝えいただく。その結果として、「こう思ったので、こうしていただきたい」という要望のようなまとめ方ができるのであれば、議論していただきたい。

会長 ■市民大学を通して、「生涯学習センターとは」という部分も含めて提案できれば良いのではないか。

委員 ■生涯学習センターの役割の中で、市民大学の役割が「あなたを励まし、地域を育てる」というところまで行っているのか、行っていないか。もう少し改良していけば、よりよいものができるのではないかという発想で、皆さんも考えていると思う。現状と今後の向かうべき方向性を出せば良い。

2016年1月25日(月)10:00~12:00

検討経過のとりまとめに向けて

<「地域を育てる」委員別意見>

委員 ■市民大学のコンセプト「あなたを励まし地域を育てる」のうち、「あなたを励ます」と「地域を育てる」を2段階に分け、「あなたを励ます」に分類される講座でもインプット＝学ぶだけでは、地域に出て話をしたり活動グループを作るのは難しいので、アウトプットとして表現することを学ぶ講座を取り入れた提案である。別紙参照①

■他の資料を見たり修了生団体の情報を踏まえると、各項目の達成有無の丸はもう少し増えると思う。別紙参照②

■これまでの「あなたを励まし地域を育てる」という市民大学のコンセプトはそのまま続けて良いと思う。ただし、その中で「あなたを励まし」は達成できても、「地域を育てる」まで結びつけるのは難しいということを感じている。学んだことを自分の言葉にして周りに伝えていくことができ、修了後もフォローをするような講座や場所を生涯学習センターで提供して行くのがよいのではないかと思った。別紙参照③

<「検討のまとめ」の構成>

委員 ■評価に関しては、科目別評価として事業評価を科目ごとに挙げて運営協議会でどういった評価をしていくのかということを取り出してみる、さらに今の段階の全体の総合評価を出す。別紙参照④

会長 ■最終的には、各論と総論でまとめて行けばいいと思っている。「はじめに」で我々がしていることの位置づけをしたい。運営協議会第1期では評価、やり方の是正、第2期では市民大学を生涯学習という観点から位置づけてみようということで行なってきた。経済事情等を考えると必ずしも総花では今までのような結果を得られず、もう少し絞った形のほうがはるかに効率的であるということを主張していかないといけない。そういった中で、市民大学を取り上げて、その意義を再確認し、再構築して行く。市民大学の中の意義として「あなたを励まし地域を育てる」という点は皆さんで一致していると思うが、生涯学習センターの意義としてインプットとアウトプットを明確にし、市民大学のポリシーを見て行くことで生涯学習センターのあり方や方向性全体としてみるのができないか。なかなか人数が集まらない講座は、物理的な数の問題で受講数が増えないなら削ろうという議論ではなく、質の問題が大事になる。

委員 ■「はじめに」ということでこの問題をどういう風にして取り上げたかという背景や運営協議会の第1期から第2期に渡っての検討の状況や背景をまず述べて、「市民大学の意義とあるべき姿」についてゴールの問題も含めて協議した内容を述べる。その次に、色々なデータも踏まえ見学をした感想などを交えた「市民大学の現状と課題」という章立てにして、さらに「未来への展開」として可能な範囲で連携支援のあり方といった点も具体的提案といった形で章立てにし、最後に「まとめ」で締めくくりたい。

■6つのステップを逆さまにしたらいかがだろうか。ステップダウンしてしまう見え方になってしまうので、ステップアップするイメージが良いのではないか。インプット、アウトプットという点については、インプットだけでなく台形の図のイメージで、1つの講座を学びながら、色んなことを考えながら知識や考えが出たり入ったりするものが良いのではないかと思った。

■すべての結論に行き着かなくても、今まで議論してきたことがとても大切であり、私自身が学んだことも含めて、共に考えたという課程が重要であると思う。

<「運営協議会と行政の関わり」「事業評価」>

会長 ■ どうしても行政は、市民の代表者が述べた意見について、そういった意見が出ているから従うという論理で動いている気がしていて、なかなか行政の方々がそこに入って平等に議論できるような環境はいつもないように思っている。行政がもっとリーダーシップを取ってもよいのではないかと思う。やはり、そういったものなのだろうか。

センター長 ■ 運営協議会は、評価が主な役割ということが要綱で決められている。それ以外の点を、委員の皆さんにご意見をいただきたいと思っている。形として最終的な結論は出ないかもしれないが、良い機会なので今まで議論されてきたことを報告として形にしていただければと考えている。

会長 ■ センター長の意見としてはそれで正しいと思うが、我々委員も評価から逸脱しているわけではない。評価を正しくするためには、その方向や周りのことがわからないとできない。

委員 ■ この市民大学についての議論についても、私は評価は90%だと思う。市民大学全体としてどうなのかという評価をして、課題があるならば課題を挙げ、「こういった方向性がありますよ」ということを簡単な文章で伝えるべきだと思う。

■ 生涯学習センターの職員が意見を述べないほうが良いと思う。職員として個人個人が意見をお持ちだと思うがそれを言わないのは、我々委員を尊重しているからだと思う。折角ここまで協議してきたなら、出して行けば良いと思う。自分自身が変わることは、自分自身の責任だと思う。

■ 評価するにも、色々知らないと基準もなければ、どう評価するのかわからないと思う。市民大学が総花的で変動的な部分もある中で、無理に「地域を育てる」という点に持って行く必要があるから、修了生団体を作ったり、討議を入れることを無理に行なってきたように感じる。今はプログラムの作り方として市民主体で行なうなら、ワークショップ的な手法や市民が主体となり調査をしたり、プロジェクトを作ってみるとか、やり方なども変わって行くのではないかと感じている。今までやってきたことは評価し、「私たちはこういう風に考えました」というものを出し、生涯学習センターとしても「皆さんの意見を聞きました」というだけで終わってしまうのは欲求不満に陥ってしまうので、生涯学習センターとして今後どうしていくのか、方向性をお聞きしたいと思っている。

<プログラム委員>

担当課長 ■ 市民大学担当職員の意見交換を行い、現在まとめている。2年後のプログラム委員の改選に向けて来年度ある程度の方向性を打ち出したい。

委員 ■ プログラム委員の意見をもっと聞く必要がある。

会長 ■ プログラム委員の改選にはセンターの意見が必要である。

担当課長 ■ 改選を目処に考えていきたい。

委員 ■ 生涯学習センターとし市民大学をどう位置づけたいのか。

担当課長 ■ 「アウトプット」部分については他部署と連携を考えながら市民大学を展開していきたい。

委員 ■ アウトプットという言葉に認識の相違があるかもしれない。講師になるだけがアウトプットではなく一緒に学んで楽しかったでもいいのではないか。

第2期町田市生涯学習センター運営協議会委員名簿

NO	氏名	ふりがな	選出区分	備考
1	石川 清	いしかわ きよし	学識経験を有する者	会長
2	岩本 陽児	いわもと ようじ	学識経験を有する者	
3	太田 美帆	おおた みほ	学識経験を有する者	
4	辰巳 厚子	たつみ あつこ	学識経験を有する者	
5	小川 久江	おがわ ひさえ	家庭教育支援活動の経験を有する者	副会長
6	貝原 俊明	かいばら としあき	町田市立小学校校長会の代表	
7	井手 伊澄	いで いずみ	町田市立中学校校長会の代表	
8	佐合 昭浩	さごう あきひろ	市民のうちから公募したもの	
9	布沢 保孝	ふざわ やすたか	市民のうちから公募したもの	
10	二見 秀太郎	ふたみ ひでたろう	市民のうちから公募したもの	
11	吉川 雅子	よしかわ まさこ	市民のうちから公募したもの	
12	押村 宙枝	おしむら ひろえ	生涯学習又は社会教育の活動の経験を有する者	
13	富川 尚子	とみかわ なおこ	生涯学習又は社会教育の活動の経験を有する者	
14	西原 要四郎	にしはら ようしろう	生涯学習又は社会教育の活動の経験を有する者	
15	柳沼 恵一	やぎぬま けいいち	生涯学習又は社会教育の活動の経験を有する者	